

広破経広破論に表われた否定の意味

久留宮 円秀

(1)

広破経広破論は72偈からなる経と中観論者龍樹のそれに対する自註とから成っており、彼が正理学派に対して加えた批判の作品である。正理学派は伝説上 Gautama 又は Gotama によって開かれた学派であり、彼らの哲学は勝論哲学に基礎を置き、学説全体は16句義にまとめられて Nyāya-sūtra 五編十章の中におさめられている。

(2)

広破経広破論は正理学派の説く16句義の各々に批判検討を加えて、それら16句義の非存在を述べることを造論の趣旨としている。

広破経広破論72経のうち第2経から第19経にかけては量 (pramāṇa) ・所量 (prameya) の2句義に関する検討がなされているが、そのうち第11経から第15経の間に龍樹と正理学派との両者の「否定 (pratiṣedha, dgag pa)」に関する句解の相異を見い出すことができる。

以下においてはまず正理学派の量・所量を理解し、広破経広破論における量・所量に関する検討を述べて、そこに表われている龍樹と正理学派の言う「否定」の意味に言及しよう。

正理学派の言う量 (pramāṇa) とは対象の知覚を成立させるもの、即ち知識を得る道具をいい、所量 (prameya) は広い意味で知識の対象であり、量によって知覚されるものである。

広破経広破論では、このような量と所量とが成立するためには次の三つの関係のいずれかでなければならないとしている。即ち龍樹は

『(1)量が所量よりも前時に存在するか、

(2) [量が所量よりも] 後時に存在するか、

(3)あるいは量と所量とが同時に存在するかのいずれかである』、と第11経註釈に述べ、以てその各々の場合を検討している。

(1)の場合、量によって知覚される『所量が無いとき、〔量は〕何に対し量であるのであろうか』と量が量たり得ないことを説明している。

(2)の場合は、『〔己に〕存在する所量に対しては〔一体〕何が量となるのか。未だ生じていない〔量〕が己に生じてしまっている〔所量〕の量であることはできない。何となれば、〔そのようであれば、未だ生じていないはずの〕兎の角等も量であることになってしまう』と、量・所量の成立を否定している。

(3)の場合は、『その〔量と所量とが同時に存在するという〕ことも不可能である。例えば同時に生じて存在している牛の一本の角の間に〔一方の角が〕因で〔他方の角が〕果〔という因果関係〕があるということができないのと同じである』と、やはり量・所量の成立の不可能なことを説明している。

以上の龍樹の批判に対して正理学派は次の反駁をしている。即ち『〔前後同時の〕三時において量と所量とは成立しないから、〔成立していない量所量を〕否定することは不可能である』（第12経）といい、『否定が成立するときには量と所量も成立する』（第13経）と、量と所量との成立を主張している。即ち龍樹が量・所量の存在を否定するということは、否定さるべき量・所量が存在しているからこそ、龍樹の否定が成立するという意味である。

正理学派には‘pratiyogin’ という考え方がある。pratiyogin ītyasy ābhāvaḥ sa pratiyogī と定義せられ、Xなるものの非存在を論じる時、そのXなるものが pratiyogin である、という意味である。例えば gr̥he ghaṭābhāvaḥ という場合、ghaṭābhāvasya ghaṭaḥ pratiyogī ということで、ghaṭa が pratiyogin である。即ち瓶 (ghaṭa) が家 (gr̥ha)

に無い (abhava) というとき、その『瓶』という言葉によって言い表わされている対象物が必ず存在するという意味である。ここで正理学派は龍樹が量・所量の非存在を言うからこそ、量・所量という言葉の対象物が存在すると主張していると考えられる。このことから正理学派のいう否定は 'pratiyogin, という考え方にもとずいていると言えよう。

次に龍樹のいう否定の意味について考察してみよう。広破経広破論第15経に龍樹は『成立しないもの〔を成立するとするところ〕の〔誤った〕分別を捨て去る〔ために中観論者は否定を説く〕のである』とし、その註釈に譬を引いて、『例えば水のあまり深くない場所で、深いという〔誤った〕分別をもって恐怖をいだく人がいたとした場合、その恐怖の念を捨て去るために別に知らせて「この場所の水は深くない」と告げてやることだが、この〔水の深い場所という〕存在しない場所における〔誤った〕分別を除くために認められているから……〔中観論者は正理学派の誤った分別を捨て去るために量・所量の〕否定をするのである』と説明している。

以上の考察に従えば、正理学派は現に存在しているものに対して否定があり、龍樹は存在していないものに対して否定があるといっていると理解される。

このことは正理学派と中観論者龍樹とその両者の間における存在論的立場の相異によるものに外ならないのではなからうか。

正理学派は『凡そ名前⁽³⁾で対象をもたないものはなく、有自性のもに実有なる名前がある』という有自性論の立場にあって否定を論じ、否定があるから否定の対象物が存在し、量をはじめとする16句義の成立を主張したのである。

他方龍樹によれば、一切の存在物は無自性であるから空である、という無自性論の立場から、名前が実有であるとはせず、名前も無自性であり、空であるから非実有であるとして否定も実有でなく無自性であるに外なら

ないとしている。だから龍樹は広破経広破論の最後に『「量等の16句義とそれらに対する否定とは」二つとも不可得であるから、「それら量等の16句義とそれらに対する否定と」が不成立であるとき、不成立であるのみである』（第72経）と述べ、その註釈書の中で『一切の存在物は無い、と承認するのである』と述べて、否定が説かれても、その否定は決して有自性なものとして成立するわけのものではなく、無自性なものであると説明している。

結局、先にも述べたように、正理学派のいう否定も、中観論者龍樹のいう否定も、ともに有自性なるものを対象としているのであるが、正理学派は有自性論の立場から有自性の対象物は存在するといひ、他方龍樹は無自性論の立場から有自性の対象物は誤って分別されたものであるとして、その対象が存在しないという結論を得ていると思われる。

(註)

- (1) 影印北京版西藏大藏経第95巻第17函114a-8ff.
インド学試論集 IV-III P. 129ff, *The vaidalyaprakarana of Nāgārjuna*,
by *yuichi Kajiyama*.
- (2) cf, *Nyāya-sūtra* 1-1-1
- (3) *The Vīrahavyāvartani of Nāgārjuna with the Author's Commentary*, ed. E. H. Johnston and Arnold Kunst, 1951. P. 44.